

2021年度 卒後アンケート（2019年度卒業生）結果報告

卒後1年を経過した卒業生に対して、本学部のディプロマ・ポリシーの活用度や職業経験、学生生活で役立ったこと等に関して質問紙調査を実施した。

1. 対象および方法

対象者：2019年度卒業生 95名

調査期間：令和3年5月7日～6月14日（約6週間）

方法：無記名 web 調査

卒業生の自宅へQRコード付きの依頼文を郵送し、Google フォームへの入力を依頼した。回収数が少なかったため、愛知医科大学病院へ就職した卒業生に対し、リマインドメールを1回送信した。

2. KEY POINTS

- ・卒業生のディプロマ・ポリシーの活用度はほとんどの項目で75%を超えており、活用度は高かった。
- ・卒業生が大学生活の中で社会人になって最も役立っていると思っていることは「大学での同級生との交流」であった。
- ・80%以上の卒業生が仕事のやりがいを感じていると回答したが、半数以上の卒業生が現在の職場からの離職を考えていた。

3. 結果

回収数は28名、回収率26.3%であった。

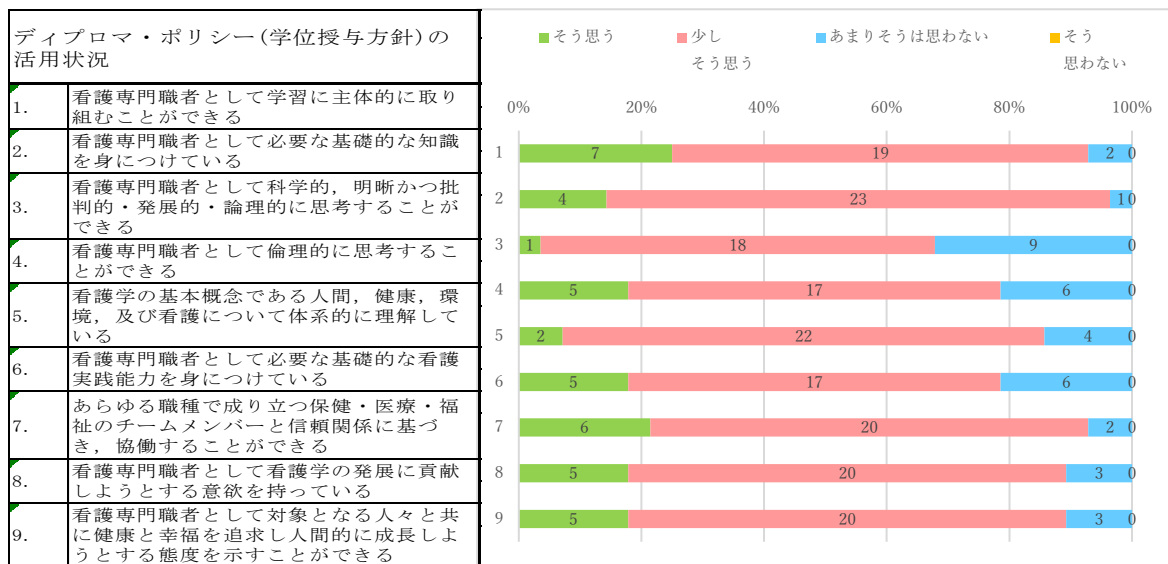
1) 対象者の基本属性

回答のあったすべての卒業生は女性で、現在就職していた。26名（92.9%）が看護師として就業しており、保健師は2名であった。

2) ディプロマ・ポリシー（学位授与方針）の活用状況（項目1～9）（図1）

ディプロマ・ポリシー9項目の活用状況を「そう思う」から「そう思わない」までの4段階で調査した。ほとんどの項目で、「そう思う」「少しそう思う」と回答した卒業生が75%を超えており、ディプロマ・ポリシーの達成度は高いと考えられた。一方で「3.看護専門職者として科学的、明晰かつ批判的・発展的・論理的に思考することができる」に関しては、「そう思う」「少しそう思う」と回答した卒業生は68%に止まった。卒業生らの回答した、「就職後必要とされる能力（自由回答）」で最も多かった回答は「アセスメント力」であり、必要と感じるからこそ課題と捉えている卒業生が多い可能性があると考えられた。

図1. ディプロマ・ポリシーの活用状況



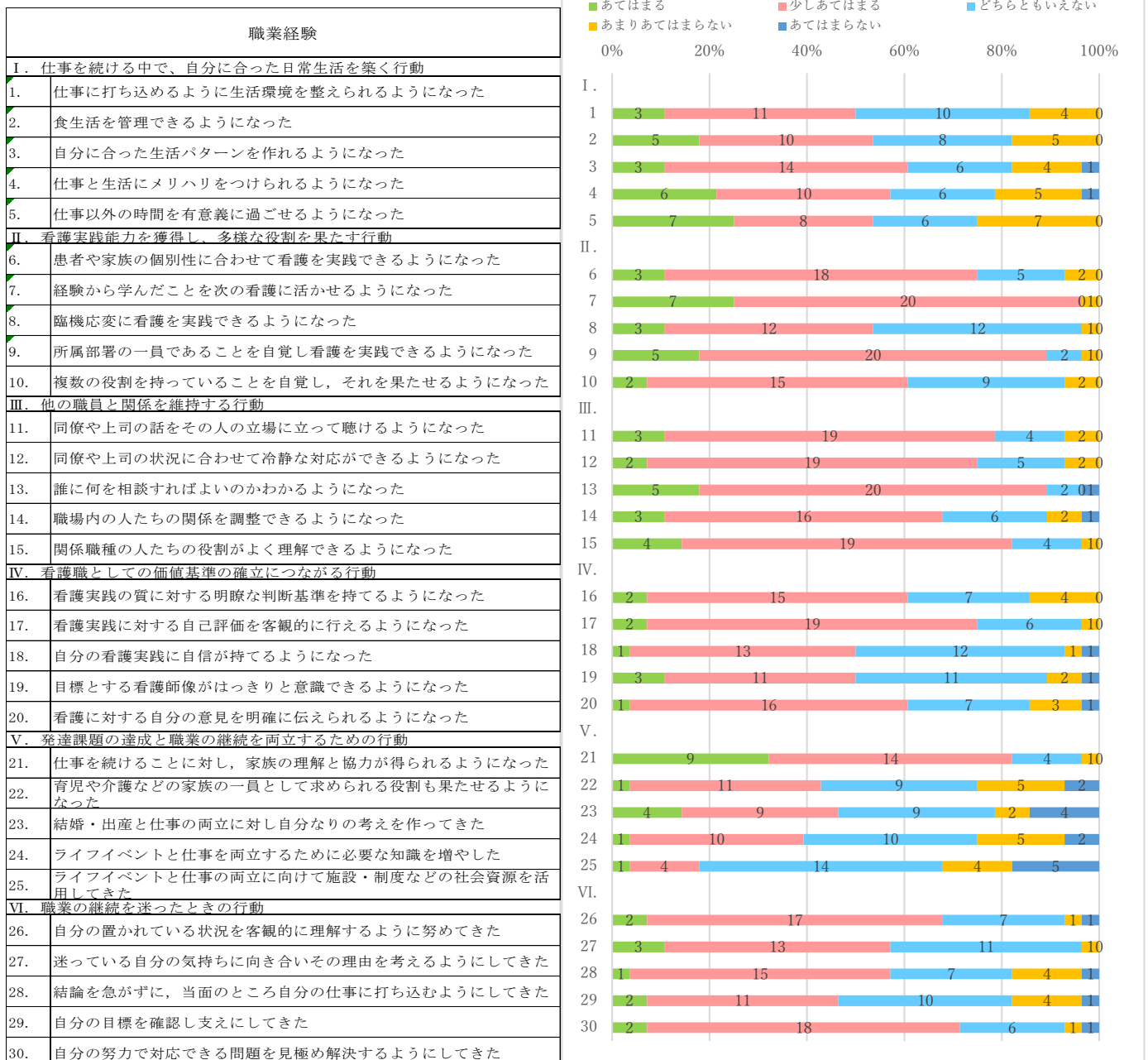
3) 職業経験の質得点

卒業生の職業経験の質得点は、48点～150点で平均107.6点（SD17.5）であった（図2）。なお、昨年度は平均112.3点（SD:9.88）一昨年度は平均108.1点（SD:18.5）であり、大きな変化は見られなかった。

卒業生の職業経験の質得点が高かった項目は、「7. 経験から学んだことを次の看護に活かせるようになった」「9. 所属部署の一員であることを自覚し看護を実践できるようになった」といった、役割を果たす行動、「13. 誰に何を相談すればよいのかわかるようになった」といった、他の職員と関係を維持する行動であった。一方で卒業生の職業経験の質得点が低かった項目は、「V. 発達課題の達成と職業の継続を両立するための行動」であり、この要因として、卒後1年が経過したばかりの卒業生には、結婚や出産等のライフイベントがまだ起きていないことが多く、質問に当てはまらない卒業生が多かったことが考えられた。

文献) 鈴木美和 (2004) : 看護職者の職業経験の質に関する研究 —測定用具「看護職者職業経験の質評価尺度」の開発—, 看護教育学研究, 13 (1), 37-50.

図2. 職業経験の質

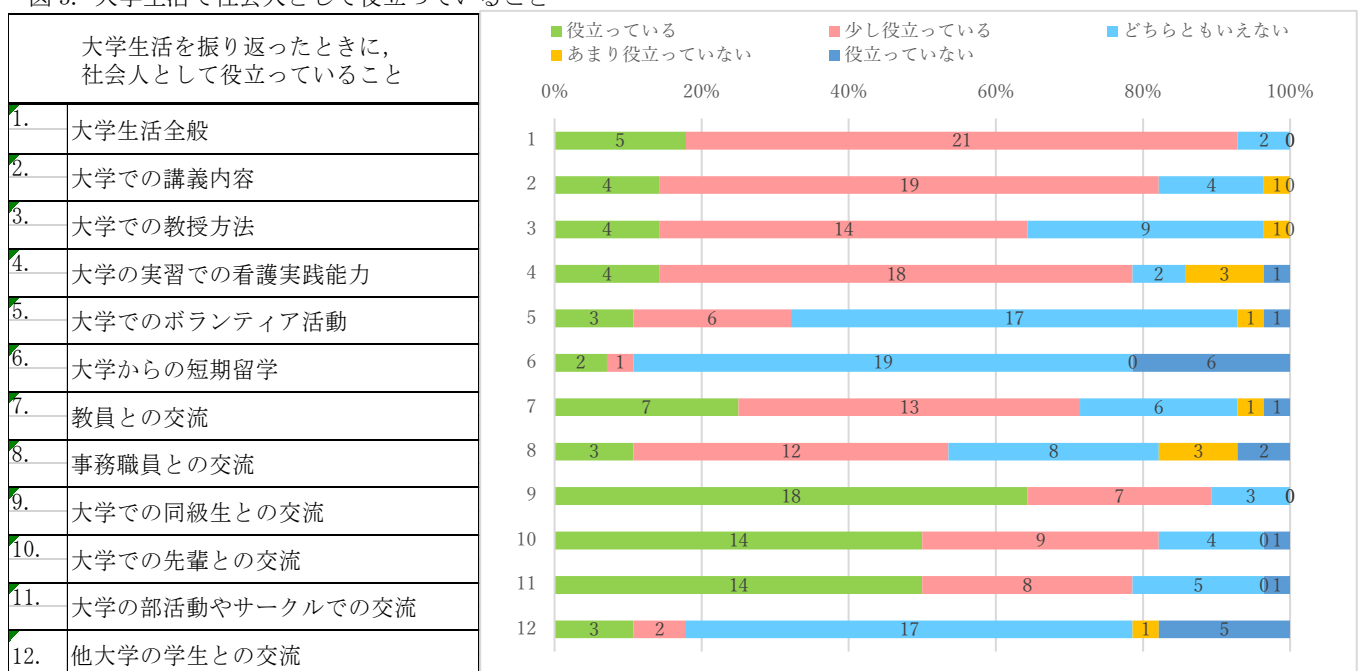


4) 大学生活を振り返ったときに、社会人として役立っていること

大学生活を振り返ったときに社会人として役立っていることを、12項目について「役立っている」から「役立っていない」までの5段階で調査した(図3)。

12項目中最も「役立っている」と回答した卒業生の割合が多かった項目は「9. 大学での同級生との交流」18名(64.3%)であり、次いで「9. 大学での先輩との交流」14名(50.0%)、「11. 大学の部活動やサークルでの交流」14名(50.0%)であった。大学生活の中で得た人間関係や社会体験が卒業後に影響を与えていることが伺えた。「役立っている」と回答した卒業生の割合が最も低かった項目は「大学からの短期留学」で2名(7.1%)であった。全ての項目で「あまり役立っていない」「役立っていない」と回答する卒業生は数名程度であった。

図3. 大学生活で社会人として役立っていること



5) 現在の仕事のやりがいと満足度、離職、進学希望の有無

卒業生に対して、現在の仕事のやりがいを「大変感じている」から「全く感じていない」、仕事の満足度について「大変満足」から「全く満足していない」の各々4段階で調査した。80%以上の卒業生が仕事のやりがいについて、「大変感じている」、「感じている」と回答した(図4)。仕事の満足度については、「大変満足」「満足」と回答した卒業生は67.9%であった(図5)。

一方で、「仕事をやめようと考えていますか」という問いに対して、離職する予定であると回答した卒業生は2名(7.1%)であった(図6)。2名ともが今後の予定について、看護師として正規雇用で別の病院・クリニックに勤務すると回答した。半数を超える卒業生が、離職を考えているが今すぐは辞めないと回答した。卒業生らは仕事のやりがいを感じていながらも、現在の職場を将来的には離職したいという希望を持っていることが伺えた。また、大学院の進学に興味があると回答した卒業生は28名中3名おり、卒後1年が経過し、各々の将来設計について考えている姿勢が伺えた。

卒後本学に希望することについて複数回答で調査した。最も多かった回答は、卒業生の交流会(同窓会、卒後看護師・卒後保健師交流会)であった(図7)。

図 4. 仕事のやりがい

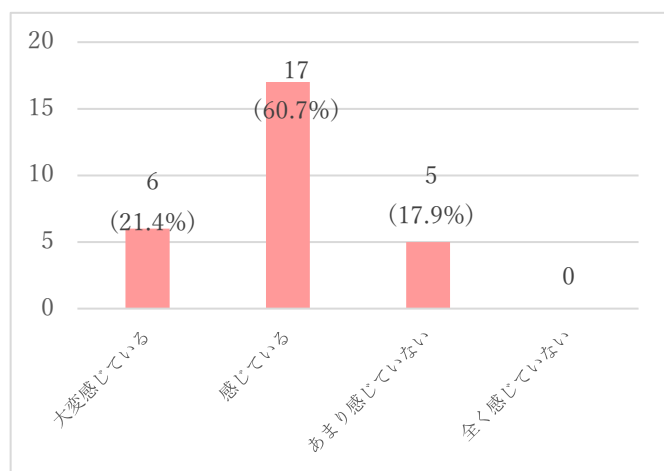


図 5. 仕事の満足度

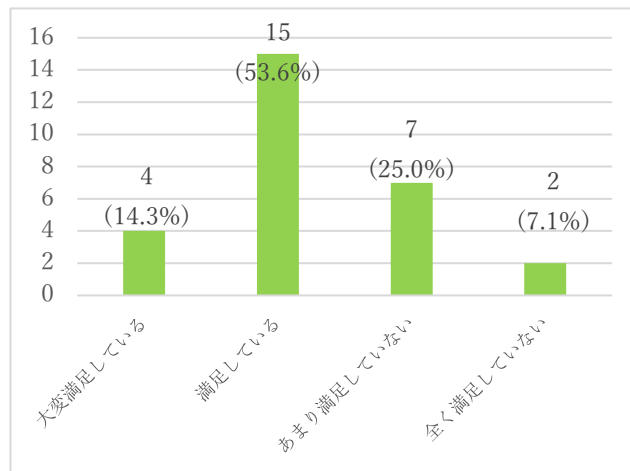


図 6. 離職希望の有無

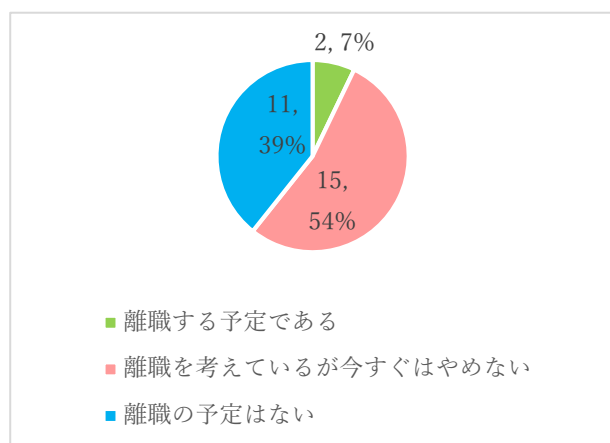
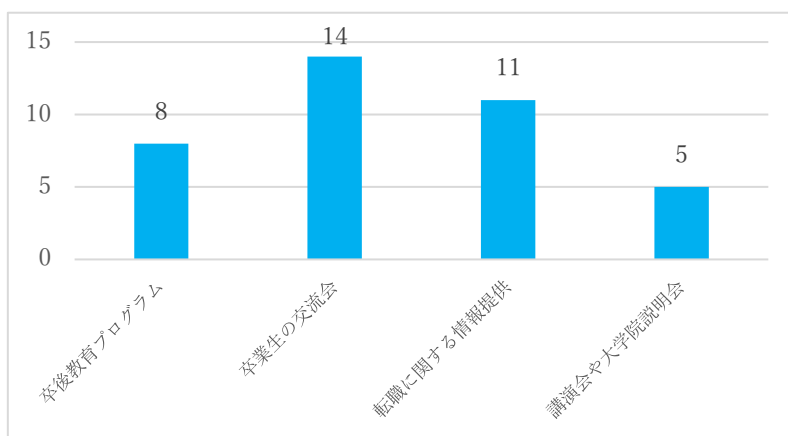


図 7. 卒後本学に希望すること



6) まとめ

本調査では、卒後1年が経過した卒業生らに、現在の就業状況、ディプロマ・ポリシーの達成状況および職業経験、学生生活で役立ったこと等に関して質問紙調査を行った。本調査で回答のあった卒業生28名は、全員看護職として就職していた。卒業生らのディプロマ・ポリシーの達成度は、9項目中ほとんどの項目で達成状況について前向きな回答が多く、おおむね達成できているものと考えられた。

28名中2名が離職を希望しており、約半数の卒業生が将来的な離職を考えていた。仕事に対してはほとんどの卒業生がやりがいを感じており、また満足度も60%以上が満足と回答していた。このことから、卒後2年目を迎え、今後の展望について考えている時期であることが伺えた。また、10%の卒業生が大学院への進学に興味を持っていた。加えて卒業生らは、本学に対し「卒業生の交流会」を希望しており、卒後も本学に対して関わりたい希望を持っていることが伺えた。

本年度の卒後アンケートは28名から回答があり回収率は26.3%であった。例年、卒後アンケートの回収率は低く、昨年度は9名(8.4%)、一昨年度は31名(30.7%)であった。本調査では、返信者の回答が比較的前向きなものが多かったが、もともと大学生活について前向きな印象を持っている者が返信している可能性は否めない。今後は回収率を上げるために、調査票の内容の吟味だけでなく、調査方法の工夫を考慮する必要があると考える。